好きなことを続けるということ

第36回上野の森美術館大賞展・絵画大賞「プラスチックガール」

新型コロナウイルス感染症が猛威を振い、閉塞感が漂う地域。企業や地域の経済に影を落とす中、オリンピックの延期、夏の甲子園やインターハイ、各種コンクールの中止など、1年間の集大成として練習を頑張ってきた子どもたちもその影響を受けています。

そんな子どもたちに、飯南町出身の油絵画家がエールを贈ります。

飯南町出身の画家

令和2年2月27日、東京都台東区、上野公園。園内の一角、上野の森美術館ギャラリーで開催されているのは、飯南町出身の油絵画家 八嶋洋平さん(34)の描く絵画の展覧会です。会場内の一番奥に展示されている今回の主役作品“プラスチックガール”は、平成30年に制作した縦164×横130・3センチメートルの油絵。

この日は展覧会の最終日で、一緒に絵を学んだ後輩たちや地元の同級生など多くの人が来館し言葉を交わしていました。

洋平さんは、昭和58年から毎年開催されている「上野の森美術館大賞展」の第36回大賞展(平成30年)で絵画大賞を受賞。全国から応募のあった953点の作品の中から6点が受賞作品に選ばれ、先に紹介した“プラスチックガール”を描いた洋平さんが、最も優れた作品に贈られる大賞を受賞しました。今回の展覧会は大賞受賞者の作品を展示する個展で、令和2年2月15日～27日の日程で開催され、期間中3千人を超える人が来館しました。

やりたいを実現するために

洋平さんは飯南高校出身。もともと絵を描くことは苦手だったといいます。ではなぜ画家の道に進もうと思ったのか。

高校卒業後の進路を決める2年生の終盤、将来の職業の候補に挙がっていたのが“保育士”と“絵に関わる仕事”でした。「保育士は子どもが好きだったこと、絵に関わる仕事は中学生の時の写生大会で描いた絵が賞を受賞してうれしかったことが記憶に残っていたから。でも保育士は、小さな子どもに関わる仕事だから責任が重たくて大変そうだなと。少しネガティブな理由から、とりあえず芸術の方に進んでみようと思いました。けど絵を一から生み出すことには苦手意識があって、絵を直すことだったら手先が器用な方だったので、できるんじゃないかと。でもそれには化学の知識が必要で、これが難しくて…。だから最終的に『絵を描く』仕事の道に進むことを決めました」

しかし当時、飯南高校には美術の授業がなく、教えてもらえる先生もいませんでした。そのため、三刀屋高校の美術の先生に「将来、絵を描くことを仕事にしたいのでデッサンを教えていただけないか」とお願い。週1回三刀屋高校に通いながら学びます。そして高校3年生の3月下旬、京都嵯峨芸術大学(現・嵯峨美術大学)への進学が決まりました。

※デッサン…鉛筆やペンなどで、物体の形や明暗などを平面に描画する美術の技法

未来を拓いていく出会い

「実は、美術系の大学に進学する人の多くは、高校生の頃から授業後にほぼ毎日予備校に通って、ひたすら描く練習、デッサンの練習をしているんです。絵を描く上で必要な描写力、観察力、構成力が当時の僕には足りなかった。大学に入ってから本格的に勉強する人はかなり珍しかった」

大学進学から1年経ったとき、転機が訪れます。京都の画塾で先生をしていた飯南町出身の親戚の方との出会いです。

親戚の方のお母さんの葬儀で、洋平さんのおじいさんがその先生とばったり会って、洋平さんが京都で絵を勉強していることを話すと、「私のところで学んでみないか」と。それから大学の授業後に週4日ほど画塾に通うように。

京都嵯峨芸術大学を卒業後は広島市立大学大学院に進学。ここで平成27年に結婚することになる妻のめぐみさんと出会います。めぐみさんも画家で、作家「山浦めぐみ」として日本画の制作を手掛け数々の賞を受賞しています。

京都嵯峨芸術大学4年生の時の卒業制作

実はめぐみさんは、まだ高校生だった洋平さんに絵を通じて会ったことがあり、洋平さんのことを覚えていたのだそう。「描いた絵が著しく下手で」と笑いながらめぐみさん。「この頃は絵を描く勉強をまだちゃんとする前だったから。描き方を分かってなくて描いちゃった感じ。でも京都で勉強して、基礎的なことを身につけて、大学院に進学できた。先生との出会いが将来を変えたんだね」

洋平さんが続けます。

「『縁』って思ってもみなかったところでつながっているよね。でもこの出会いがなかったら絵を描くことを今も続けていられたかどうか。芸術の仕事は、人との『縁』が一番大事。

例えば展覧会に作品を展示して、見に来た人が『私のギャラリーでも展示してみない?』と。次の展覧会でも同じことが繰り返されてつながっていく。見てくれる人がいないと、作品たちは世の中の人の目に触れることすらないかもしれない。だから『縁』はとても大事」

八嶋さん夫婦は現在、飯南町野萱にあるアトリエで絵画を制作しています。大きな絵を描くアトリエと、自宅兼アトリエの2カ所。いずれも地元の方から借りている場所です。「この場所で制作ができるのも、応援してくれる人、家族が築いてきた地域の人との関係のおかげ。そして、これまで絵を描き続けてきたからこそ今につながっていると思います」

※アトリエ…制作を行う専用の作業場

倉庫の一角を借りて大きな作品を描くためのアトリエとしている。左2作品は縦227.3×横181.8cm

上野の森美術館外観

同級生と一緒に形にした自宅兼アトリエ

美術館での展示風景

八嶋洋平さん

昭和60年:飯南町生まれ
平成20年:京都嵯峨芸術大学(現・嵯峨美術大学)芸術学部造形学科卒業
平成25年:広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程　単位取得満期退学
平成28年:第2回藝文京展2016・優秀賞、シェル美術賞展2016入選
平成30年:第30回全国絵画公募展IZUBI・優秀賞、第36回上野の森美術館大賞展・絵画大賞、ドイツ・ハノーファーにて滞在制作